

「車は急に止まれない」について

—— 不自然さの諸要因 ——

丹 保 健 一

〈はじめに〉

本稿は、「車は急に止まれない。」の文を不自然と感じさせている諸要因を明らかにしようとするものである。不自然さを生み出す総ての要因について考えようとしたため、これまで見逃しがちであった、文末尾のル形（いわゆる現在形）タ形（いわゆる過去形）による違い、「急に」と、「止まれる」の「止まる」（意志動詞）との結合による意味構造の矛盾、文に対する文脈の補完度と言った点にまで言及することになった。これらのことを無視しては、不自然さの要因を説明できないことを示し得たと思う。

〈1〉 これまでの論争とその問題点

「月刊言語」誌上の論争参加者は、次のような人々である。

- (1) 本多勝一「連載・日本語の作文技術8」（1976・1月号）
- (2) 北原保雄「本多氏へ—『車は急に止まれない』はおかしいか」（1976・3月号）
- (3) 堺則彦「『日本語の作文技術』を読んで」（1976・3月号）
- (4) 本多勝一「連載・日本語の作文技術12」（1976・5月号）
- (5) おかのあつのぶ「『車は急に止まれる』も両義—日本語の作文技術をめぐって」（1976・5月号）
- (6) 北原保雄「再論『車は急に止まれない』」（1976・6月号）
- (7) 堺則彦「助詞『は』について」（1976・7月号）
- (8) 本多勝一「堺則彦氏への回答」（1976・8月号）
- (9) 原口庄輔「否定の磁場—『車は急に止まれない』をめぐって」（1976・8月号）
- (10) 本多勝一「『車は急に止まれない』について」（1976・10月号）
- (11) 坂口頼孝「私見『車は急に止まれない』」（1976・12月号）
- (12) 大久保忠利「『車は急に止まれない』論争の本質」（1977・4月号）
- (13) 北原保雄「『車は急に止まれない』をめぐって〈文法的に考えるということ〉」（1977・6月号）
- (14) 原口庄輔「『車は急に止まれない』の文法性〈否定の磁場再訪〉」（1977・6月号）

主要と思われるものを順次紹介していくことにしたい。本多氏(1976・1)、坂口氏(1976・12)、大久保氏(1977・4)、北原氏(1977・3)、原口氏(1976・8)(1977・6)を主要なものとする。

<1-1> 本多説(1976・1)

「飛び出すな、車は急に止まれない」これは警察の作った立て看板によく書かれている有名な標語である。この内容の論議は別として、言葉だけの問題、つまり日本語として読んで、何だか変だと思わないだろうか。(95p)

これが、長い論争の出発点である。本多氏はさらに続けて、このままでは、「文法的に強引に解釈すれば、『車に何か故障が起きて、急に全然止まれなくなってしまった』ということになる。」(96p)とし、正しくは、「とび出すな、車は急には止まれない」とすべきだとしている。

このような本多氏の指摘に対して、先ず反論を示したのが北原氏である。次に、北原氏のものを見るべきであろうが、表されたものを一つ一つ順を追っていくことはかえって繁雑になると思われる。北原氏のものには後に見ることにし、次に坂口氏のものを見ることにしたい。

<1-2> 坂口説(1976・12)

坂口氏の主張は、「急に」は動作性述語を要求する、リズムの上からも不自然になっている、(韻律についてはすでに原口氏の指摘がある。)の二点にまとめることができる。

まず「急に止まれる」自体言えるだろうか。私の感覚では正しい文ではない。「急に」は動作性述語を要求する。「急に止まる(った)」は言えても、「急に止まれる(た)」は言えない。「急にドウスル(シタ)」が普通なのである。～テキルというような状態性述語とは結び付かない。「止まれない」はさらに～ナイの状態性が加わっているのでなおさらである。(105p)

ただでさえ、「急に」は動作要求性を持っているので一呼吸置かれると、「急停止できない」の意がますます保てなくなる。(106p)

氏の述語の意義特徴についての説明は、原口氏も指摘するように問題はあるものの、その着眼には注目したい。

<1-3> 大久保説(1977・4)

大久保氏は、北原説(1976・3)に賛意を示すという立場を明らかにしつつ、意見を述べている。これまでに見られなかった指摘に絞って紹介することにしたい。

大久保氏は、急に止まれない＝「急に止まれ」ない、があり得ることを論証するとして、次のように述べている。

ばくはつぎの説明法をとります。～中略～修用文素「急に」が「止まる」の語基「止m」までかかり、合成された句「急に止m」に「aれ」が媒介して否定助動詞「ない」がつく。(84p)

又、大久保氏は、坂口氏の「『なる』という語はないのだから、『車は急に故障～』の解釈は成り立たない」とする考えに対して、「なる」が「止まる」という語に内蔵されていると見るべきだと次のように説明している。

問題の文「車は急に止まれない」をよく見れば分かるように、この「止まる」(→止まれ+ない)は単なる「動作性述語」でないのだ。これが大切。この文で「止まる」は「走っている」状態から「止まった状態」に変化する、((1)「動作性」(2)「状態性」のほかの)(3)「状態変化動詞」なのである。したがって、「走っている状態」から「止まった状態」に「なる」意味を見事に含んでいる。しかも、「急に」はそうなる変化に対して「限定修飾」しているのだ(「ユックリでなく」と)。(85P)

「急に」が「止m」に係り、「aれ」を媒介として、「ない」が結びつくと単純に考えてよいのか、又、「止まれない」中の「止まる」が「なる」を含んでいるとしてよいのか、等について疑問が残る。

<1-4> 北原説 (1977・6)

北原氏は、論争のきっかけとなった、「本多氏へ『車は急に止まれない』はおかしいか」(1976・3月号)の外、「再論『車は急に止まれない』」(1976・6月号)に於いても意見を述べているが、いずれもごく限られた紙幅の中でのものである。そこで本稿では、詳しい記述の見られる『『車は急に止まれない』をめぐって<文法的に考えるということ>』(1977・6)を中心に見ていくことにしたい。

北原氏は、「車は急に止まれない」という表現は、期待通りの自然な表現であるとし、学生に対するアンケートの結果(変である61人、変でない62人)を、変であると答えないのは、「文法的な知識がないと疑われるようで、無理に変であると答えた者が多かったようである。」(34P)と判断を下している。

その上で、『『車は急に止まれない』は、何故に、あり得ない表現だと感じられたり、A₁(筆者注；A₁とは「車に何か故障が起きて、急に全然止まれなくなってしまった。」という解釈を指す。)のような解釈しかできないと考えられたりしがちなのだろうか。』(35P)と問いを発し、二つの理由を挙げている。

車にはブレーキがついているのが普通であるから、車は止めようと思えばいつでも止められるものである。つまり、「車は止められる」ものなのである。だから、「車は止まれない」はそれだけでは事実に合致しない表現ということになる。「止まれない」のは「急には」であって、そうでない方法では「止まれる」のである。そういう考えが底にあって、「は」が欲しくなるのではないか。(35P)

第2の理由については、次のように述べている。

(車というものは；筆者補注)止まれることが、常態であるから、「急にとまれない」は、

突然止まれないという異常事態になったというように解釈されやすいのではなからうか、ということである。この場合、「止められない」でなく、「止まらない」であることが、そういう解釈を一層助長しているかも知れない。というのは、「止められない」ならば、その主格は運転者で、運転者が車を急停止させられないの意に解釈されやすいが、「止まらない」の場合、主格は車であり、運転者とは関係なく、車の方に事情があって、車が止まらないという状態になるという解釈が導かれやすいように感じられるからである。
(36 P)

第2の理由に関して、「急に」を「突然」と解するためには、「なってしまった。」のような表現があって落ちつくのである。」(36 P)としている。

さらに、又、「車が急に止まる。」「車は突然止まらない。」の両文を例に挙げ、「急に」を「突然」と解した前者が自然で、後者が不自然であるのは、「突然」が、「事態の起こり方」を修飾するものだからとして、次のように説明している。

「止まる」「止まらなくなる」などには、大久保氏⑧(筆者注：⑧とは、『車は急に止まれない』論争の本質』(1977・4)を指している。)が指摘しているように、「なる」の意味が内蔵され、もしくは顕在している。「突然」はこの「なる」のなり方、つまり、事態の起こり方を修飾限定しているのである。それに対して、(二)(三)(四)の「止まれる」「止まらない」「とまれない」などは、坂口氏⑦(筆者注、⑦とは「私見『車は急に止まれない』」(1976・12)を指している。)のいうところの状態性述語で、全体で状態を表現しているものであり、事態の起こり方を修飾限定する「突然」とはなじまないものである。(37 P)

又、連用修飾語の修飾先という点から、坂口氏に対する反論も行っている。短期間の意を持つ「急に」は動作性概念を修飾しているのであり、「急に止まれない」「急に止まれる」「急に止まらない」も自然であるとし、次のような例文を用いて説明している。

車は、スピードを出している場合には、急に止まれない。しかし、ゆっくり走っている場合には、急に止まれる。

スピードを出しすぎているから、急に止まれないのであって、ゆっくり走っていれば、急に止まらないわけがない。(38 P)

以上が、北原説の主たるものである。北原氏の説には、不自然さを感じない理由を現実の論理との係わりに於いて細かに見ようとしている点や、「突然」の意の「急に」が、「事態の起こり方」を修飾する点(この点については検討を要するが)があり、傾聴に値するものが多い。

しかし、納得のいかない部分も見られる。例えば、学生のアンケートでほぼ半数が変だとしているのは、無理に変だと答えているのだ、と断定していることに関していえば、本当に何も問題がなければ、誰一人として変だと思わないであろう。どこか変だと感じたから、半数近くも人が変だとしていると思われる。「変だ」と感じたそのことに注意する必要がある。

その他の点についても、検討すべき点が多いが、後に述べることとの重複をさける意味で

ここでは触れないことにする。

〈1-5〉原口説(1976・8、1977・6)

原口氏のものは、「否定の磁場—『車は急に止まらない』をめぐって」(1976・8)、「『車は急に止まらない』の文法性—否定の磁場再訪」(1977・6)の両者を見ておかねばならない。原口氏の指摘・考察をまとめると次のようになる。

- ① 標語として扱うのか、否かを分ける必要がある。
- ② 標語として自然に感ずるのは、「とびだすな、車は急に止まらないのだから」と解釈しているからだ。
- ③ 「車は」を総称的か特定のかに分けて考える心要有る。
- ④ 埋め込み文中ではすわりがよくなる。
- ⑤ 「急には」は状態性述語を要求するという指摘には問題がある。
- ⑥ 否定磁場標識の「は」との共起には、四種があり、どれに属すると見るかによって適格性の判断が異なってくる。
- ⑦ 韻律上の方策により、自然になる可能性がある。

氏の考察は広い視野と深い洞察力によって成されており、これまでの諸氏の分析の中では、北原氏の説と並んで最も重要視すべきものであると思う。

後の議論と関連を持つと思われる部分を詳しく紹介しておくことにしたい。

氏は、標語としては正しく、又、自然であるとして、次のように説明している。

- (3) (筆者補注；とびだすな、車というものは急に止まらないのだから)をそのまま標語にすることは、リズムをくずしてしまうため、不可能である。しかも、この場には、「のだから」という部分は、消し去っても、その文が理由を表すことははっきりしている。言わなくても済むことは言わないのが俳句や標語などの常套的方法であるから、(1977・6, 43P)

この説明は充分納得のいくものである。

又、係助詞「ハ」には、「車というものは」とする「総称的用法」と「ある(特定の)車は」とする「特定の用法」があり、この二つを分けて考えるべきだとした指摘も大切である。(勿論、これまでもこの二つの用法についての理解があったことは言うまでもない。)だが、単独に「車は急に止まらない。」を考える場合、総称的解釈、又は特定の解釈となる条件についての言及も望まれる所である。

「急には」は動作性要求があり、「急には」は、状態性要求がある、とする坂口氏の説に対しては、次のように反論している。

さて、「急には」という表現は、状態を表す表現と呼応するというのが正しければ、次のような例はすべて正しい文になるはずである。

(8) *急には見ている (見える・ねている・書ける・知っている)

(1977・6, 44P)

この指摘も注目したいものの一つである。

否定磁場標識としての「は」に関しては、次の四つの可能性を挙げて説明している。

(9)(a) 時々つかまる。

(b) 時々つかまらない。

(c) 時々はつかまらない。

(10)(a) ようやく見つけた。

(b)* ようやく見つけなかった。

(c)* ようやくは見つけなかった。

(11)(a) かなりわかる。

(b) かなりわからない。

(c)* かなりはわからない。

(12)(a) いそいそとでかける。

(b)* いそいそとでかけない。

(c) いそいそとはでかけない。

(1977・6, 45p)

「車は急に止まれない」をおかしいとする人は、この文を上(12)の類と同類と考えているのであろう。～中略～ 又、よしとする人は、(1)(筆者補注；「車は急に止まれない」)のような文を、(9)と類似のものと考えているのであろう。

(1977・6, 46P)

とし、原口氏自身は、文章表現に於いては、埋め込み文以外では避ける、としている。これらの指摘も大切なものであるが、やはり、さらなる説明が求められる所である。

埋め込み文中の「急に」の振舞いについては、主文中と異なるとし、次のように説明をしている。

「車は急停止できない」という意味で、(5) (筆者補注；「車は急に止まれない」) と(16)の二つの文を比べて見ると、

(16) 車は〔急に止まることができ〕ない(16)の方はすわりがよいのに対して、(5)の場合には、やや落ちつかない感じがする。ところが、(5)のような表現でも、

(17) 車は〔急に止まれない〕こと

(a)をあなたは知っていますか。

(b)が明らかになった。

のように埋め込み文の中に入れるとすわりがよくなる。～中略～

(18) 「急に」の類の語は、否定の領域内にある場合、埋め込み文中にあることが表面上明確な場合は、ハを従えなくとも完全に適格であるが、そうでない場合には、ハを従えなければ、文としての妥当性が低くなる。

ここで注意すべきことは、(18)のような一般化の及ぶ範囲は、「急に」というような語が、ハを従えても従えなくとも文法上成立する場合(～略～)に限られるということである。
(1976・8, 72～73P)

この指摘は、原口氏の説の中でも、特に重要なものの一つであると思われる。というのは、これまでの論争がこの点を見逃していた感があるからである。しかし、何故埋め込み文中であれば自然となるのかについての説明のないことが惜まれる。

以上の外、韻律上の問題についても述べているが、本稿では、韻律上の問題については解決済みのものとして、分析の対象としていないので、詳しい紹介は省く。

〈1-6〉 論争の成果と残された問題

ここで、論争を通して、解決されたと思われる事柄と、残された問題について指摘しておくことにしよう。

- (1) 「とび出すな!車は急に止まれない」は、原口氏の言うように「とび出すな!車は急に止まれないのだから」と解することは可能である。問題は、「車は急に止まれない」にある。
- (2) 音韻上の問題は、原口氏によって解決されたと見たい。
- (3) 「急に」は動作性述語を、「急には」は状態性述語を要求するという考え方は、原口氏の指摘もあるように単純には考えられない。
- (4) 「止まる」は、「なる」を含むか否かについては検討を要す。
- (5) 「急に」が「止m」に係り、「aれ」を媒介して「ない」と結びつくと単純に考えてよいか疑問がある。
- (6) 「急に」が埋め込み文中で自然となることについての説明が求められる。
- (7) 「総称」「特定」の意がどのような条件によって決定されるのか。
- (8) 文末の「ル形」(終止形)、夕形(過去形)の違いにも注目すべきではないか。
- (9) 「急に」の意味と、「止まれない」の「止まる」の意味との整合性についても考えるべきではないか。
- (10) 以上の外の視点はないのか。

〈2〉 不自然さを生じさせる諸要因

不自然さを感じさせる要因の解明は、様々の視点から見ていくことが要求される。しかし、それらの要因が複雑に絡みあっていることも事実である。そのため要因の一つ一つを分離して考察することはむずかしい。これが問題の解明を困難にしている原因である。

ここでは、考察の進め易さを考えて、次のような項目を立て、順次検討していくことにしたい。前に挙げた問題点の指摘と一つ一つ対照させて記述する方法はとらない。しかし、直接一つ一つの説明をしなくとも自らそれらの問題点の解決を示すことにはなると思う。

- (1) 「急に」の二つの意義用法について
- (2) 「～ナイ」の意味・働きについて
- (3) 「止まる」及び「ル形」「夕形」について
- (4) 「～ハ～ル。」文型の意味について

- (5) 「～レル」について
 (6) 「急に」と「急には」の別について

<2-1>

「急に」には、「短期間に」と「突然」の二つの意味があるとされている。「急に」にこのような二つの意味があることが、問題の所在を分かりにくくし、又、不自然・自然を判断する場合に於いてもその感じ方を複雑にさせているものと思われる。先ずこの二つの意味・用法について考えておくことにしたい。

- きゅうに〔急に〕(句)；前兆などなく、また少しずつでなく、にわかには物事の起るさま。にわかには、突然。(『例解国語辞典』)
- 急；〈形動〉②前ぶれがなく、突然おこるようす。にわか。(『学研国語大辞典』)
- きゅう 2 (そうなると思っていたときに) ひじょうに早くそうなること、また、そのようす。とつぜん。(『外国人のための基本語用例辞典』)
- Kyū ni; ad 1 〔直ちに〕 quickly～
 - 2 〔突然に〕 suddenly～
 - 3 〔予告なしに〕 at a moment's notice～
 - 4 〔鋭く〕 sharply～

(『研究社新和英大辞典』)

以上の辞書類を見ると、「研究社新和英大辞典」以外は、いずれも、「前兆なく」「前ぶれなく」「思っていないときに」と、「急に」が「予想なく起こるできごと」に対して用いられること、つまり、「意外性」をその意味に含むものであることを示している。このような記述は、「急に」の持つ意味合いを正しく表現したものであると言えるであろう。『研究社新和英大辞典』には、1として、〔直ちに〕 quickly をあげているが、これらの中に「意外性」を含ませなくてよいのかは疑問である。(なお、4として挙げられている〔鋭く〕 sharply の意は、他の意味と性格を異にするので、ここでは問題としない。) それでは、いわゆる「突然」とされる「急に」と「短期間に」とされる「急に」の別はどこから来るのであろうか。それは、恐らく、「突然」と言い換えられる「急に」と、そうでないものがあることから出てくるとと思われる。

- (1) 急に笑い始めた。
 (2) 最近、急に頭がよくなった。

(1)は「究然」で置き換えられるものの、(2)は不自然となる。これは、「突然」がある瞬間に成立する動作・作用・現象に用いられる語であることによる。(『基礎日本語』61Pにこの指摘がすでにある。) 勿論、「突然」と「急に」(「突然」に近い意の)には微妙な意味の差があることは言う間でもない。

(2)の場合は、「なった」の中に時の推移を見ることができるといえる。ということになると、「急に」は、実現が、瞬時の場合に於いても、ごく短期間の場合に於いても用いられることが理解されよう。瞬時であるか、時間幅を持つものかは述語によって決定されると言えよう。

以上のことは、さらに細かな検討を要しようが、ここでは、「短期間」の「急に」、「突然」の「急に」のいずれであろうと、それらが「意外性」「予想外」「前ふれもなく」といった意味合いを含むということを確認して、先に進むことにしよう。

なお、補文中では、この「急に」が持つ「意外性」の心的なものが、素材的になるということを描きしておく。

〈2-2〉「ナイ」の特殊性について

- (3) 車は急に止まれないことを知っていますか。
- (4) 車は急に止まれないことが明らかになった。
- (5) とびだすな、車というものは急にとまれないのだから。
- (6) スピードを出しすぎているから、急に止まれないのであって、ゆっくり走っていれば急に止まらないわけがない。

上の例に示したように、補文中の「ない」は、主文末尾の「ない」に比べ、すわりが良いと思われる。何故、主文中の「ない」はすわりが良いのであろうか。

- (7) 車は急に止まれない。

補文中に於ける「車は急に止まらない」が主文としてのそれよりすわりの良いことは、すでに原口氏が指摘している。だが、そのことについての説明はされていない。説明が求められる所である。

主文中の「ない」が二つの表われ方をすることはすでに知られている所である。一つは対象性の「ない」、今一つは作用性の「ない」である。前者の働きを「否定認定作用」、後者の働きを「否定断定作用」と呼ぶことにしよう。この外、意志の入り込む、「否定的意志作用」も考えられるが、本稿では直接係わりを持ってこないので指摘するにとどめる。

一方、補文中の「ない」は、いわゆる渡辺氏の言う「統叙作用」は見られるものの「認定作用」は見られないと考えた方が良さそうである。素材の世界のレヴェルである。この「ない」の働きを、「素材表示作用」と名付けることにしよう。

このように考えてくると、「急に」は、「否定認定作用」及び「否定断定作用」とは共起せず、「素材表示作用」（「統叙作用」を含む）とは共起することが推察される。だが、これに対しては、次の文などには認定作用があるのではないかという疑問が出てくるであろう。

- (8) 車は急に止まった。

しかし、「ない」による認定が特殊であることを理解すべきであろう。あるものを有るとしてではなくて、無いものを認定するという所に心理的負担が生ずるのである。この点が不自然さにつながるものと考えられる。

- (9) 人間は魚ではない。
- (10) 太陽は西からのぼらない。

(9)(10)の文を読むと、それだけでは何となく物足りないと言う感じを持つことになる。

- (11) 人間は考える葦である。
- (12) 太陽は東からのぼる。

(9)(10)と(11)(12)との感じ方の違いは、(9)(10)の理解にとって、前提が必要であることから生じている。前提や、文脈の補いが易いものほど受け入れ易くなるということが言えよう。否定の文は、初出の文としては、やはり受け入れにくいのである。

〈2-3〉「～ハ～ル形」文型の意味について

「車は急に止まれない」を「車は急に止まれなかった」とすると、より自然に聞こえるように思われる。このことについて先ず考えておこう。

そもそも「ル形」は、単に「現在」を表わすのみではなく、「未来」「習慣」「真理」「性質」等を表わし、「タ形」は「過去」のみではなく、「完了」「過去の習慣」「発見」「驚き」等を表わす。このことを、「～ハ～ル型」の文型の中で考えると、「車は～。」の意味内容は限定されることに気付く。

- (13) 車は止まる。
- (14) 車は止まった。

(13)(14)は各々「～ハ～ル」「～ハ～タ」によって、文の意味が規定されている。そのため、自然・不自然の受けとめ方も異なってくることになる。

(13)の場合、「車というのは、ブレーキをふむと止まる。」とすると自然な文となるが、このままでは、前提、条件が明示されていないだけにとまどいがある。確かに(13)を「車というのは止まるものだ」と無理に解することも出来ようが、それはやはり次のような文とは余程異なる。

- (15) 車は便利だ。
- (16) 車は危険なものだ。

勿論、次の文のような、補文中では自然な文となることは言う間でもない。

- (17) 車が止まるのを見た。

この場合補文中の「ル形」は、「性質」を表していないからである。

(14)の文の自然さは、「止まった」が、現実の動きの一断面を示しているにすぎず、又、「車は」も「特定の車」を指していることになり、「～ハ～ル」型と異なるのである。

〈2-4〉「～れる」について

(18) 車は止まれる。

「は」は、対照的、題目的の両方に解することができ、又、特定の、総称的の両者にも解することができる。しかし、どのように解釈しようと、「止まれる」の「止まる」が意志的動詞として働くということには変わりはない。それは、次の文章の比較によっても明らかであろう。

(19) ブレーキをかけると車は止まった。

(19)の「止まった」の「止まる」は無意志動詞として働いている。

「は」を総称的なものとして、このことをさらに見ておこう。

(18)の文は、その現実の論理を考えると、「車というものは、運転者がとめようと思えば止めることができる。」などと解されよう。

(20) ブレーキをかけると車は止まれる。

(21) ブレーキをかけると車は止まる。

(20)(21)に於いて、(20)がやや不自然で、(21)が自然であるのは、「止まれる」「止まる」の違いによっている。つまり、(20)の場合は、「止めている主体」が運転手であるにもかかわらず、車が止めることができるとなり、矛盾が起こるのである。「～れる」により「止まる」が意志的に理解されるために起きた不自然さである。勿論、「ブレーキをかけると」と言った表現がなければ、「ブレーキをかける主体」が表現されず、それほど不自然さは感じないことになる。

以上のことから、「～れる」が「止まる」に下接することによって、「止まる」は意志動詞として働き、無意志動詞であり得なくなる。このことが、文内容の不自然さに影響を及ぼしていると言うことが言えよう。

<2-5>「急に」と「急には」の別について

(22) 車は急に止まれない。

(23) 車は急には止まれない。

(24) 車は止まれない。

(22)(23)は、(24)に比べれば自然であろう。それは現実の論理と合致しているからである。「車は止まれない」ことはないからである。

しかし、(22)と(23)との比較では、(23)は自然であるが、(22)はやや不自然だとする立場がある。筆者自身も、(22)と(23)とを比較する限りに於いては、(23)がより自然に受け入れられる。

しかし、原口氏が指摘されるように、次のような文では不自然さはない。

(25) とびだすな！車は急に止まれないのだから

(26) 車は急に止まれないことを知っていますか。

(22)と(25)(26)とでは、〈2-1〉で述べたように「ない」の働きに違いが見られる。このことが、不自然さと自然とを分けているものと考えられよう。つまり、(22)の「ない」は「否定断定作用」あるいは、「否定認定作用」として働いているのに対して、(25)(26)中の「ない」はそのような働きを持たず、又、「急に」もそのことと関連して、素材化していると考えられるのである。

一方、(23)の「急には」は「ない」による「否定断定作用」の焦点が「急に」にあることを示しているものとなっている。別の視点から言えば、「主題-叙述」の叙述の焦点を示しているとも言える。又、さらに言えば、「急には」の「は」は、「急に」を強強・限定し、叙述が「急に」という条件下であることを表現しているということもできる。このことは、「急に」は止まれないが、「ゆっくり」なら止まれる、と言った意味を暗示させることにもつながるのである。(23)の意味構造を考えると、

(25) 急には+止まれない。

(25)のようになり、意味内容は、「予告なしに」+「止まることができない」となり、何の矛盾も生じない。

一方、(22)「車は急に止まれない。」の場合、その意味構造は、大久保氏流に考えると、次のように示される。

(26) 急に+止m + a れ+ない。

(26)を、その意味内容から見ると、「予告もなしに+意識的に止まる」ことができない。となり、論理的に矛盾を生ずることになる。「予告もなしに、意識的に止まる」が矛盾するのである。

(27) 車は急に止まった。

(28) 車は急に止まれるようになった。

(27)(28)の場合、(27)は「急に」が「止まる」に係るとしても意味的に不整合がないために、自然なのである。又、(28)では「急に」は「なった」に係っていくので問題はなくなる。

〈3〉「車は急に止まれない」の不自然さの諸要因—まとめにかえて—

〈2〉に於いて述べて来たことをまとめると次のようになる。

「車は急に止まらない。」の不自然さの要因

- (a) 「～ハール (ナイ)」が車の性能、性質を示す判断文であるという制約を持つこと。
- (b) 「急に」が「予想もなく、前ぶれもなく」と言った意味合いを心的態度として持つこと。(主文中において)
- (c) 「止まれる」の「止まる」が意志動詞として解されること。

- (d) (a)(b)(c)のことから、「急に」と「止まれる」の「止まる」が論理的に矛盾をきたしている。

なお、「車は急に止まれない」を自然に感じさせているのは、無意識に「急に止まれないのだから」といったように補っているか、「急に」に焦点を置き「急には」のように解しているからだと思われる。不自然なものの欠けているものを自然なものとして受け入れようとするのは、ごく普通に見られる心理である。

—1984・10・12稿了—

参考文献

- (1) 「連載・日本語の作文技術8」『月刊言語』(1976・1) 本多勝一
 - (2) 「本多氏へー『車は急に止まれない』はおかしいか」『月刊言語』(1976・3) 北原保雄
 - (3) 『『日本語の作文技術』を読んで』『月刊言語』(1976・3) 堺則彦
 - (4) 「連載・日本語の作文技術12」『月刊言語』(1976・5) 本多勝一
 - (5) 『『車は急に止まれる』も両義—日本語の作文技術をめぐって』『月刊言語』(1976・5) おかのあつのぶ
 - (6) 「再論『車は急に止まれない』」『月刊言語』(1976・6) 北原保雄
 - (7) 「助詞『は』について」『月刊言語』(1976・7) 堺則彦
 - (8) 「堺則彦氏への回答」『月刊言語』(1976・8) 本多勝一
 - (9) 「否定の磁場—『車は急に止まれない』をめぐって」『月刊言語』(1976・8) 原口庄輔
 - (10) 『『車は急に止まれない』について』『月刊言語』(1976・10) 本多勝一
 - (11) 「私見『車は急に止まれない』」『月刊言語』(1976・12) 坂口頼孝
 - (12) 『『車は急に止まれない』論争の本質』『月刊言語』(1977・4) 大久保忠利
 - (13) 『『車は急に止まれない』をめぐって〈文法的に考えるということ〉』『月刊言語』(1977・6) 北原保雄
 - (14) 『『車は急に止まれない』の文法性〈否定の磁場再訪〉』『月刊言語』(1977・6) 原口庄輔
 - (15) 『日本文法陳述論』(1968) 大久保忠利
 - (16) 『基礎日本語』(1977) 森田良行
 - (17) 『ことばの意味3』(1982) 国廣、柴田、長嶋、山田、浅野
- 参考辞書類
- (18) 『例解国語辞典』(1956) 時枝誠記編
 - (19) 『学研国語大辞典』(1978) 金田一、池田編
 - (20) 『外国人のための基本語用例辞典』(1971) 文化庁
 - (21) 『研究社新和英大辞典』第四版(1974) 主幹増田綱